

開催概況

日時：平成29年12月8日（金曜日）
午後7時00分から8時30分
会場：成美教育文化会館 3階大研修室
参加人数：43人（うち傍聴者18人）

参加団体等

- 区市町村
- 地区医師会
- 在宅医
- 病院
- 病院協会
- 歯科医師会
- 薬剤師会
- 看護協会
- 介護支援専門員研究協議会
- 老人保健施設協会
- 保険者協議会

主な意見交換の内容

【在宅療養に関する地域の現状・課題等について】

- 在宅医を専門に担っている医師が少ない。その結果、患者が集中してしまい疲弊してしまっている。
- 団地にエレベーターがないから階段を降りられず通院困難といった慢性疾患を抱える患者に対し、かかりつけ医が少しでも訪問診療により対応して欲しいが、実際は難しい。
- 看取りや、重い患者は在宅専門で対応することで、少しでも訪問診療を担う人材が増えればと感じる。
- 訪問診療に取り組んでいない医師も多く、余力はまだある。
- 訪問診療といっても、疾病によって需要ニーズが異なる。
- 独居の患者だと、最初から在宅医療を受けるのは無理と決めつけている患者が多く、行政による地域に対する普及啓発が重要。
- 在宅医にとって、24時間診療体制の確保が大きな課題だが、訪問看護ステーションが連携に入ってくると大変心強い。
- 退院カンファレンスに訪問看護ステーションが参加してくれていると情報が上手く伝わる。

【地域と病院の連携について】

- 病院と在宅医の連携はよくとれている。病院から在宅に戻るためには、ケアマネジャーとの連携が大きなポイント。
- 予定入院患者の場合、自分のケアマネジャーが誰かを把握しているが、予定外入院だと把握していないことが多い。
- ケアマネジャーとして関わっている利用者の急変時に、医療者から家族同等に意見を求められる場面もあり、対応に苦慮。
- ケアマネジャーで、医師に対する苦手意識を持っている者はまだいる。
- 病院と地域の診療所で、多職種を含めて顔の見える関係作りが少しずつ進んできている。
- 病院側の取組として、地域の医療・介護関係者と連携した多職種連携、顔の見える関係作りを進めている。
- 在宅医療を推進するうえでは、訪問看護ステーションの役割が大変重要と感じている。
- 救急の立場から、慢性疾患の在宅患者の中には、救急搬送が本当に必要であったか疑問に感じるケースが多い。